



Caritas Kaleidoscope

カリタス女子短期大学

英語・英語圏文化専攻

Vol. 26

異文化交流と異文化体験学習

英語・英語圏文化専攻 教員

前田 隆子

5月下旬から6月上旬にかけて、当専攻では異文化交流と異文化体験学習が行われました。

異文化交流は、アメリカの College of St. Elizabeth から3名の学生が、広島で開かれる平和会議に出席する前に本学を訪れ、5月25日から27日まで本専攻2年生の家でホームステイを経験した際に行われました。今回は、この夏からイギリスへの長期留学を控えている2名の学生にその様子をレポートしてもらいます。

郡司さんのお宅で、LauraとChristineがホームステイする際に、松橋さんと私も2日間宿泊させていただきました。この期間はなるべく英語でコミュニケーションを取ろうと努力しました。26日は浅草見物に出かけ、浴衣を買い、それを着て、最後の夜は幸田さんのお宅で“寿司パーティー”をしました。彼女たちは、浴衣も天むすも、焼き鳥もそばも、そしてお寿司も大変気に入ったようでした。

(英語・英語圏文化専攻 2年 清水桃子)



みんなで寿司パーティー

今回は英語でのコミュニケーションの難しさを痛感しました。彼女たちが帰国したあとも、中国系アメリカ人のChristineとメールでやり取りを続けています。彼女は中国で幼少期を過ごしたために、英語を習得するのに苦労したようで、私の今の状況をよく理解してくれ、励ましてくれます。メール交換をし合える彼女との関係を今後大切にしたいと思います。また、今回はホスト側の大変さ、そして楽しさを体験できました。私は留学先ではホームステイをするので、この経験を生かしたいと思います。(英語・英語圏文化専攻 2年 松橋花子)

さて次にご紹介するのは、毎年恒例の British Hills(福島県)での異文化体験学習です。今年は6月3日~4日にかけて英語・英語圏文化専攻1年生が参加しました。その様子をアンケート調査の結果を中心にご報告します。

今年度のレッスンは全部で4種類[Cooking(スコーン作り)、3-D Card(3次元の絵のように浮き上がって見える紙細工のテクニックを学ぶ)、Aromatherapy(植物のエッセンシャル・オイルの効能を学びながらバスソルトを作る)、Design a T-Shirt(ロウケツ染めでのTシャツ作成)]の中から一つを選び、参加しました。レッスン内容についての満足度は、「大満足34%、満足66%」と100%の学生が満足だったようです。

British Hillsの施設は、中世の英国様式を再現したもので、英国貴族の屋敷(Manor House)や、12世紀から18世紀に至る建築様式のゲストハウスを配する研修施設です。この施設に関する満足度は、「大満足37%、満足39%、やや不満22%、大いに不満2%」という結果が出ました。不満を感じた学生の主な理由は、携帯電話の電波が届かないことであったり、ドミトリタイプ施設の施設に宿泊したために、部屋にトイレとシャワーが無いことであり、いつもと同じ生活が出来ないことに対する不満だったようです。

研修へ積極的に参加したかどうかを問う質問に対しては、「はい61%、まあまあ36%、いいえ3%」という結果でした。まだ受身的態度の学生が4割程いることに少し残念な気持ちがあります。しかし、自由記述の欄を見ると、「スタッフの人たちと全部英語で話さなければいけなかったので、自然と英語力が身についた」、「もっと英語を勉強しなければ、と大変強く思った」という記述も多く、今回の異文化体験学習が、大学での英語学習のさらなる動機付

けとなったと思います。

これからも、授業以外での異文化交流や異文化体験の機会を設け、学生たちの様々な国の文化の価値観を理解し認める態度と、言語運用能力の育成が出来ればと考えています。



Top Left :
【 Cooking の先生とともに 】

Bottom Left :
【 Design a T-shirt グループの作品 】

Top Right :
【 フォーマル・ディナーの風景 】

英米文学の故郷

～ 第 23 回 ロンドン その 3 ～

英語・英語圏文化専攻 教員

伊藤 知子



サムエル・ジョン

サムエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-84) は、イギリス初の本格的な英語辞書の編纂によって知られています。彼の仕事は辞書、詩、劇、小説、評論、伝記など多岐にわたっており、18 世紀はジョンソン博士の時代と呼ばれるほどで文壇の中心的存在でした。

彼は 1709 年にイングランド中央部スタッフォードシャー州 (Staffordshire) のリッチフィールド (Lichfield) に生まれました。オックスフォード大学 (University of Oxford) に入学しますが、学費不足で中退します。1737 年、28 歳の時にロンドンに来て以来、ロンドンの中であちこちと移り住みますが、現存しているのは、ロンドン中央部ホルボーン (Holborn) のゴフ・スクエア (Gough Square) にあり、ジョンソン博士の家 (Dr Johnson's House) として公開されている一軒のみです。

彼は 1748 年から 1759 年までこの家に住み、『英語辞典』(A Dictionary of the English Language, 1755) を完成しました。現在は記念館となっており、椅子などの遺品や『英語辞典』の初版本などが展示されています。家の付近では、ジョンソンが常連として文人たちと交流したパブ、ジ・オールド・チェシャー・チーズ (Ye Olde Cheshire Cheese) が現在も営業を続けていますし、彼の銅像もあります。私がジョンソン博士の家を訪れたのは、2007 年 1 月でした。長年にわたって貧乏と戦いな



ジョンソン博士の家

がら執筆活動を続けて、独力で辞書を完成させたジョンソンの不屈の生涯に思いを馳せました。学者、文筆家としての名声を確立した後、オックスフォード大学から名誉博士の称号を与えられて、「ジョンソン博士」と呼ばれるようになりました。最後に出版したのは、10 巻からなる『イギリス詩人伝』(The Lives of the English Poets, 1779-81) で、『英語辞典』に次いで彼の代表作となりました。ジョンソンは、1784 年に亡くなり、ウェストミンスター寺院 (Westminster Abbey) に葬られました。

彼の弟子ジェームズ・ボズウェル (James Boswell, 1740-95) はすぐれた伝記『サムエル・ジョンソン伝』(The Life of Samuel Johnson, 1791) において、数々のエピソードと共にジョンソンの人間像を後世に伝えています。

聖書の英語

“*And his number is 666.*”

Revelation(黙示13章18節)の不思議な「数」

英語・英語圏文化専攻 教員

浦野 洋司

ヘブライ語のことは「ダバル」は日本語の「コト」に似ています。ダバルは「言葉」であり、ある時は「事実」でもあります。また、単なる「シンボル」以上に「実体」を伴うもので、(特に神や王の)名前は直接呼ぶには恐れ多く、発音を避けました。神の名「YHWH」を発音せず、「我が主」と読み替えるのは、天皇陛下を名前で呼ばず、「陛下」と呼ぶのにも似ています。

ひとつひとつの名前が数値を持つのも我々の感覚とは大きく異なるものであります。黙示録13章18節では「反キリスト者」の名前が数字で紹介されます。”*And his number is 666.*”これはジェマトリアと呼ばれる考え方で、文字も、名前もそれぞれに数値がありました。ポンペイで発掘されたある碑文には「愛人の名前は PH・M・E 名前は隠されている」というのがありました。PH・M・E は「545」になりますが、他の多くの名も「555」で、真実の名は隠されたままです。「666」とはいったい誰でしょうか。興味深いことに、多くのキリスト教徒をコロセウムで殺害したローマ皇帝「ネロ」の数値が「666」になると言います。

米国、カトリック大学のモンセニョール・スキーン博士の興味深い研究があります。黙示録の19章16節「王の王、主の主」というキリストのタイトルは *lwrn/rm/wyklm/klm* (アラマイ語)、その数は $50+6+200+40/1+200+40/50+10+20+30+40/20+30+40$ で、なんと「777」となります。また、別のジェマトリアを「イエス」に当てはめると「888」になります。

黙示録の反キリスト者の数、「666」の背景には、数値、「777」「888」が隠されているということなのです。文字の表面だけを読んでいる我々、現代人が聖書を書いた人々の心の底にまで到達するのは簡単なことではありません。

先生が学生だった頃

このコーナーでは、カリタス女子短大の先生方がどのような学生時代を送ったのか、学生によるインタビュー形式でお届けします。今回のゲストは、「キリスト教人間学」をご担当のピセンテ・ボネット先生です。

インタビュアーは、英語・英語圏文化専攻2年、安藤優子さん、岩岡千咲さん、泉田沙希さんです。



ピセンテ・ボネット先生

Q-1:大学では、何を専攻されましたか？

A: 僕はずいぶん長い間学生をしていましたよ。スペインの高校を卒業後、大学ではラテン語・ラテン文学、ギリシャ語・ギリシャ文学、哲学を勉強しました。その後イギリスの大学院で哲学を専攻しました。そして日本にやって来て、物理学を大学の学部で勉強し、神学を博士課程で履修しました。途中、ローマでも神学を勉強しました。

Q-2:学生時代になりたかったものは何ですか？

A: 父が医師だったので、高校生の中には医師になりたいと思っていました。しかし高校を卒業する頃には、体を治す医師よりも、人間をトータルに見る神父になるうと思ひ、道を決めました。

Q-3:先生はサッカーが得意だと伺いましたが、学生時代にはどんなスポーツをなさっていましたか？

A: サッカーや、バレーボールやハンドボールをやりました。ハンドボールはかなりうまかったですよ。(笑) サッカーは、日本に来てからもやっていて、練馬区民のサッカー大会で優勝したこともあります！

Q-4:先生のユーモアの源は何ですか？

A: 泣いている赤ちゃんを泣き止ませる方法を知っていますか？赤ちゃんを違うことに注目させればよいのです。大人も同じです。大人にも違う視点を与えることが大事です。だから、僕は人とは違うことを言ったり、やったりします。それが僕のユーモアの源であり、生きる喜びでもあります。

Q-5:先生が日々心に留めていらっしゃることは何ですか？

A: 一言では言い表せないですね。人間は一人ひとり、すがすがしい。しかも、どんなことがあっても立ち直ることが出来るから、なおすがすがしいです。

Q-6:最後に学生にメッセージをお願いします。

A: 自分の心の奥の声を聞いてみてください。そして常に自分がどういう人間でありたいかということを考えながら歩いて行ってください。



[MISS UNIVERSE 2007]

(<http://www.missuniverse.com/missuniverse/index.html>)

今年の5月28日、メキシコの首都メキシコ・シティで開かれたミス・ユニバースの世界大会で、日本代表の森理世が優勝しました。1959年に児島明子が優勝して以来、48年ぶりのことです。昨年は知花くららが2位に入賞しており、ミス・ユニバースという世界の舞台上で、日本人女性は、2年連続で注目を浴びたといえます。

このミス・ユニバースが初めて開催されたのは、1952年のことでした。アメリカのカリフォルニア州ロングビーチで行われたのですが、これがアメリカで行われた初のビューティ・コンテストというわけではありません。アメリカでは、早くも1921年よりミス・アメリカといわれる全米規模のコンテストが開催されていました。ところが、1951年に、ミス・アメリカに選ばれた女性が水着を着るのを拒んだため、協賛していた水着メーカーが撤退して、翌年新たに別のコンテストを設立することになったのです。それが、ミス USA、そしてその延長上のミス・ユニバースだったのです。

現在では世界各国で開催されるようになったこのコンテストに、日本は第1回から代表を送っています。1953年の第2回大会では、伊藤絹子が3位に入賞し、日本社会は、敗戦後だったということもあって、世界に認められたというその事実によって大いに盛り上がりました。日本でも「美人コンテスト」といった類のものが、明治時代より新聞や

雑誌などで企画されていたため、このようなコンテストを受け入れる土壌がすでにあっただけといえます。近年では、知性や教養も選考基準のひとつとなっており、候補者には個々の審査員との面接や聴衆の前で質問に答えるといったことが求められていますが、当時は水着とイブニング・ガウンを着た審査のみで、容姿重視の選考であったことから、ミス・ユニバースで高い評価を得ることは美人の象徴として考えられていました。伊藤のプロポーションを示す「8頭身」という言葉も、美しさの基準を表す言葉としてかなり流行したようです。

厳しい選考の中で、ここ2年は、日本人女性が注目される結果となっていますが、それは必ずしも偶然のことではありません。1998年よりミス・ユニバース・ジャパンの総合プロデューサーをしているフランス人女性、イネス・リグロンは、日本社会で考えられている「かわいい」女性からの脱却を図ることを試みてきたと成功の理由を述べています。日本代表を選考する際も、日本社会で認められている「かわいい」女性を選ぶのではなく、世界に通用するような、自己主張ができる強い女性を選ぶことが意識されているのです。そして送り出されたのが、海外留学の経験もある知花くららであり、森理世でした。これらの戦略的な選考が、本当に日本の代表を意味することになるのか考えるところですが、森の優勝は、明らかにその戦略がもたらした成果であったといえるでしょう。

サークルの輪

英語・英語圏文化専攻 教員

前田 隆子

今回はお昼を食べながら英語で話すサークル、English Lunch Club(顧問:パトリア保田先生)を鶴嶋望さん(部長:英語・英語圏文化専攻2年)に英語で紹介してもらいます。

In the English Lunch Club, we get together in the kitchen on Thursdays and talk about various things cheerfully without concern for age or grade. While eating lunch, we always speak in English with our club teacher. On special occasions like Christmas, we enjoy delicious cakes or cookies. New students are always welcome.

Kaleidoscope 第26号はいかがでしたか? 皆さまのご意見・ご希望・ご質問など、お気づきの点を maeda@caritas.ac.jp までお寄せください。

2007年7月17日発行

発行責任者: 前田 隆子

編集協力: 東京工科大学CS学部 塙 竜太郎

カリタス女子短期大学

Caritas Junior College

〒225-0011

横浜市青葉区あざみ野 2-29-1

Tel:045-901-5133

Fax:045-901-5066

URL: <http://www.caritas.ac.jp/english>